



地域のいとなみの背景には、
先人から受け継がれてきた知恵が息づいています。
先人たちの自然へのまなざしをたどります。

協力 ● 福知山市地域振興部文化・スポーツ振興課

城下町・福知山に遺る 光秀の治水事業と町人の知恵

由良川の中流域に位置し、77,000人が暮らす福知山市。2020年のNHK大河ドラマ『麒麟がくる』の主人公・明智光秀が「福智山城（現・福知山城）」を築き、丹波国の拠点としました。江戸時代は城下町、明治時代には商業都市として発展し、海と都とをつなぐ交通の要衝です。いっぽうで福知山市一帯は、水害の常襲地としても知られています。近年でも、2014年8月、2018年7月の豪雨で市街地一帯が水没する甚大な被害を受けました。

流路を付け替えた 明智光秀の治水事業

由良川は、福知山市の市街地近くで最大の支流である土師川と合流します(図1)。ここでいっきに水量が増し、豪雨時に河川の氾濫を引き起こします。つねに水害に見舞われる城下を守るために、光秀がこの地点に築いたのが蛇ヶ端御藪(通称・明智藪)です。現在の由良川は福知山城の東で北向きに流路を変えますが、古くは城の北側を大きく蛇行して流れていたと伝えられています。光秀は築城のさいの切り土で1.6~1.7キロメートルの堤

を築き、流路を付け替えました。

流路と城下町が整備され、頻度は減ったとはいえ、江戸時代以降も水害はつづきます。江戸時代の

福知山藩は、洪水時の役人の対応を取り決め、洪水のたびに町奉行が流路を視察し、堤防を工夫するなど、経験に経験を重ねて水害に立ち向かいました。町民たちも、水害から身を守るべく、さまざまな知恵をこらしました。自治会で浸水時の避難用の小舟を所有したり、町屋には2階や天井裏に家財をすばやく引き上げるためのタカ(滑車)を備えつけたりしました。川沿いに暮らす人たちは、盛り土の上や、できるだけ高い土地に住居をかまえました。

しかし、明治維新以降、その経験が忘れられてしまいます。明治29(1896)年、30年ぶりに街を襲った洪水では、綾部警察署から「水枕要心*」という警報が発せられたにも関わらず、福知山署は真意を理解できずに対応が遅れ、死傷者200人におよぶ大惨事につながりました。

図1 現在の由良川流路と推定されるかつての流路(赤線)



市街地のあちこちに佇む 水害の記憶

近代以降もいくども水害に見舞われてきた由良川沿いには、いまでもあちこちに水害時の水位を示す看板が立てられ、のどかな日常に注意をうながしています。市街地の御霊神社には、日本で唯一ともいわれる、堤防を御神体とする「堤防神社」が建立されています。近年、河川に排出しきれない内水の氾濫の影響で、これまでは数十年に1度だった水害が毎年のように街を襲うようになりました。こうしたなかで、先人たちが残してきた数かずの知恵をいまふたたび、ふり返る必要があるのかもしれない。

*水枕……水枕のように膨らんだ水流が押し寄せるようすを表現していると推定される。



(左)川の右手に見えるこんもりとした森が明智藪
(右)洪水時に、荷物を階上に引き上げるタカ。福知山市の治水記念館では、先人の洪水への労苦を資料で紹介。記念館の建物は、水害に対する備えが工夫されている明治10年代の町家(写真提供・福知山市役所)